

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から

主宰論説 2 2

序文：

人を問わず、動・植物を問わず、生きとし生けるものは、この世に生を受けて、幼年期・青年期を通じて、十分に生命の息吹を謳歌し、生命力の高揚する壮年期を経た後は、いろいろな老化・劣化の影響を受けながら、寿命に達し、やがては土または海に帰ることになる。この寿命たるもの、長短の差があっても、いわば、その生物種生来の生命力に基づくもので、如何なるものも逆らえず、静かに死の訪れを待つことになるのは、いわば、自然の哲理である。されども、頂いた命を大事にして、限られた寿命の中で、大波小波に揺れ揺られながらも、花鳥風月や星・虹などの自然の美景を鑑賞し、動・植物の生命の息吹を感じ、一日一日の生活とまわりの人とのつながりを大切に、夢と希望を考え、いろいろなことに感受性を持ち、天命および天寿を全うすることが、人間本来の生き方ではないだろうかと考えられる。

私が、約10年間の北九州市での生活を終えて、この土浦の乙戸南の地に戻ってから、早くも10年ぐらいになる。その間、囲碁、麻雀、クロスワード・パズル、数独パズル、グランド・ゴルフなどを楽しみながら、持病の腰の痛みなどから解放されて体調の回復を図るために、自宅近くの乙戸南公園等の周りを30分ばかり散歩することを、日課にしていた。その際、自然観察や、街並みの鑑賞、散歩中における近くの人々との会話等を通じて、折に触れ、感じたことや考えたことを、とりとめもなく書き連ねて、日々の慰みの一部としていた。また、小人閑居して不善を為さないために、いろいろの書籍や雑誌を紐解いて、考えるための糧としていた。すると、本来は見えるはずのないものが見えたり、気づくはずがないものにはつと気がついて、恐れおののいたり、また、微笑を禁じ得ないこともあった。

ともすれば、思ったほど文章が進まず、中断することもあったが、「継続こそ力なり」という言葉をもとに、書き続けることにした。手、足、肘、肩、腰、首、歯など、体のいたるところの不具合が続出し、悩まされることにもなったが、幸い、頭の働きだけは、衰えず残っていたらしい。日々の散歩や屋内での瞑想等をもとに、気が付いたり、感じたりした話題は、花鳥風月ばかりでなく、星や虹に関するものも含めて、森羅万象に関する話も含まれていると考えられる。生き方を考え、知的好奇心を満足させ、はるか遠い太古の昔からの人間の歴史を顧み、地球における生命誕生の起源とはるかなる宇宙の始まりと果てに思いを巡らし、人生に思いを込めるのに、少しは、役に立つかなと思われる。

他方、国際会議等を通じて訪れた世界各国の主な都市について、その時に感じたこと、気付いたことを、紀行文としてまとめることにした。

ここに、それらの記憶・記録を、「乙戸南雑話—花鳥風月および星と虹等を愛でながら—」というタイトルの福島啓舟随筆集としてまとめることにした。片意地を張らない、さらっとした読み物として、座右にでも置いて頂ければ、望外の喜びと考える次第である。

令和3年4月22日

乙戸南にて記す

福島敏夫（啓舟：ペンネーム）（75歳現在）

花と鳥と蝶 (No. 2)

今年も、年末・年始と2月と、2度にわたる異常なほどの大寒波と雪害に見舞われた。しかし、3月～4月にかけて、打って変わってぽかぽか陽気になった。新型コロナウイルス禍が、ぶり返し、ともすれば、気分が滅入ることも多いようだ。されど、「花は咲く」という復興支援ソングもあって、春爛漫と百花繚乱の形で、色々な花が、とりどりに咲き乱れ、生命力を誇示するようになった。既に、梅、桃、桜が満開になった。黄色のたんぽぽ、橙色のひなげし（ポピー）、青色の矢車草、黄色や白色の水仙、黄色のレンギョウ、山吹などが開花している。少し早い、つつじも、赤や白色の花を開花させつつある。他方、最近、燕も再来し、雀も姿を現しているようだ。白鷺も、水入れの終わった近くの田んぼに姿を現したようだ。モンシロチョウも、菜の花の周りを飛び回っている。改めて、動・植物が生命の息吹を発露する季節のようだ。穀雨という24節気でもある。日本は、四季の移り変わりがあり、その度に、その季節を彩る動・植物の生き生きした姿を見ることができるのは、素晴らしいことではないかと思う。常夏の南太平洋の島の風景も魅力あるのかもしれないが、日本にいることの素晴らしさを吹聴したくなる。

自由俳句：

空に月花鳥生き生き朧春

令和3年4月22日